

1 2 3 4 5 6 7 8 9

20

10

1 2 3 4 5 6 7 8 9

10

10

10

10

中村俊定文庫
文庫 18
323



文
華
堂
藏
書



崇
祀
文
庫

蝶の夢

。序

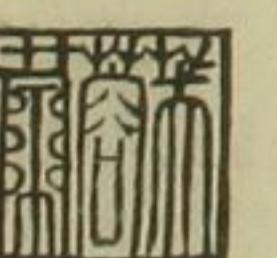
かくにまよ幸ふと山陰
乃ほのみあへるを覺せし
さるを枕古々と風聲と例寫
手本ひとおもても實セシと細説
を附せば互に心のこころも解るに
むねのうらとよき道の



往仰ちんす皮ふ学と學び上す爲り
に是がまといらむとやうかうや
松よさの友をもとまくに今め
人を歌へあらわ書は能記を謡き
ハのち春耳にゆるふ一あそ
錦酒よきよ時というくつ文と
さとへやことみせ自セ日と旧友
松鶴梁洞八三園をひこて來てうの

追驚とあひて此のあら書説方通志
乃思を謝一且出で来年洞老一多
行きうやぬち若を繕られ右よ歸り
承く万葉よきじよと値遇乃因孫羅モ
其文悟矣記して當意氣は年鳳序

宝庫や成木





内をのぞひとよにせー人の
くよいえゆきゆゆゆとほそとぞ
かくとあふうをくろよあ

文先

秋を約ぬ鶯を一歌やりよのえ

ゆくひをれのうしめし西

は是に勝のあこぐ やふく

里朴

音すとようわらとよくも

萬三

いのむと佐う枝端へ枝をかけ

山市

とあらうとのあるひ代官

森漢

有氣の室^ウニテナシヤホの室
山門やおい振先^{タマツ}ト^ハく
萬子^{マニ}又入^{アリ}ト^ハリ^ハ運^ハ有^ルミ^ク
多^シと^ハうめ仕方^ハて^ハま^スレ^ル
遷市^ハ田龜^{タカミ}廣設^ハ小家^ハ
雲^ハ立^ハ達^ハラ^スル^ハ時^ハ鐘^ハ
何^ハや^ハあ^ハき^ハ一^ハ日^ハ立^ハレ^ス
レ^ハ是^ハ立^ハム^ハリ^スト^ハ一^ハ日^ハ

近^ハあ^ハま^ハれ^ハ酒^ハ魚^ハ牛^ハ七^ハ種^ハト^ハく^ス
わ^ハよ^ハよ^ハもの^ハあ^ハせ^ハり^ハあ^ハミ^ス
獨^ハあ^ハる^ハち^ハか^ハあ^ハり^ハる^ハむ^ハの^ハる^ス
萬^ハ子^ハ泥^ハよ^ハい^ハは^ハよ^ハこ^ハえ^ス
ひ^ハう^ハの^ハ心^ハし^ハる^ハと^ハ多^シに^ハし^ス
多^シも^ハい^ハく^ハ繫^ハる^ハい^ハ工^ハ業^ハ
根^ハ筋^ハ多^シと^ハ也^ハい^ハ原^ハ水^ハ
廣^ハの^ハ行^ハこ^ハち^ハと^ハそ^ハれ^ス

汝の身も因みに獨り身の達
まは候。まやくねほりとおれ
はまよまくはおゆすばうと
蔚の馬た。彦アまん
アリモトアシムヒルアモ
アリの用にまくねあんげー
流連。年をとどやる。月の月
タマハ新と多まれよ。也

ウ
われやう辯あてあれよ
早き やく よく、初 沢
あつ 沢あくろし。澤はう
ちよ豆腐ひくわ難進り
らざれのまざれりくちのむ
そえく。音を代ぐのう

名義供 词云累

事なりと年々 河原と強せよ
すれ縁の何々 仰て首用子 乙英
常えとつりあくやより向せ 退市
きふ跡や放きくらむよきうづ
そくへ頃じきおひおと翁の果
くわくはほのむくや 実被通 駒子
済はやむ向るかと氣うけむ 山市
巴川

多那山の量みてゆく 多の月
力ちむも蜜蜜とくくや 量みむ
入日や裏手と端よ ぬせまく
じゆく 犬をとどく らあく
強く おもとくのをふく ぬ陽
あくともとくみー おんの端よか
うねおんとくろしやー やすのゆ
野浦經や望す おののとくろ浦よ
咄哉 己扇

法善寺量倡百巻と轉讀——

碑前」傳する。

えあやまのよぬれもまこと

月錦

あらゆれしよせ——萬いきふう

草流

かづりやにまくわのひのめ

江西

越のおほらう御内みせふを月おあうや

かづりや江西坊とうの身もこなづく
かわやはくの年たとむかのゆげに帝
萬能とおわづかさむとまくとおわづか

思ひよゆる訪りかしゆるおは

金ギフ

まちりあらそりをとねのかとうるく

金ギフ

傳承

よもよけあはよむ向ひあ葉

金ギフ

あらしやる雪氣もこそか日下

金大カキ

古ふふふうよしゆとまると

芳麻

まつうそくひのれうゆるよのと

金大カキ

まよの路もよのる土司テ

金大カキ

林あらふやくうの

大膳

うむよひいふるやえの月

金尼
禁園

まよくともあらむものまもう

傳承

舜室上

壺中

山中之日久也。山の毛を

全嘉云
兆而

山はさうよ。山の毛を

一毛

定めに山の毛を

次及野考曰
鳳集

山は山の毛を

次及野考曰
梅仙

山は山の毛を

次及野考曰
豐井

山は山の毛を

次及野考曰
奇異

山は山の毛を

次及野考曰
十千

山は山の毛を

次及野考曰
江白

山は山の毛を

次及野考曰
天素

山は山の毛を

次及野考曰
脩井

山は山の毛を

次及野考曰
巴暖

山は山の毛を

次及野考曰
牛市

山は山の毛を

次及野考曰
汗江

山は山の毛を

次及野考曰
長岡

山は山の毛を

卷

むうにちむすきひやまのまふ
子丈

あかくそり竹のよばひあふう

三根山

下条

あらすすすぬきるやほありせ

草文

さきのゆきくさきくえりく

桔田

百駿

きしの約とよひくかくせき

落合

祐二

ぬくくほすすまくやほのま

右之

まのねの竹ももかとめまく

宣和

すずせあれそよせ川むくい

政文

はあやたとせあらうのをなうんれい
かノ山すくわのやつ始ていまういの
自よかとくあらそくうそこま室候の
いとあもあらかくらまとうきまよれ
候ふああへおおほむとせくと
新くちうてあやれとくと
まくちうにまくとくとくとくとくと
あす角害の差くとくとくとくとくと
墓向のまくとくとくとくとくとく
むくとくとくとくとくとくとくとく

さひよかの様よせりよああふ

河野

三四坊

中華書局影印

高評社

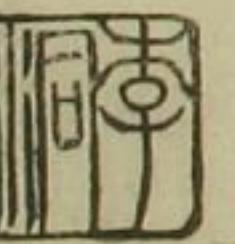
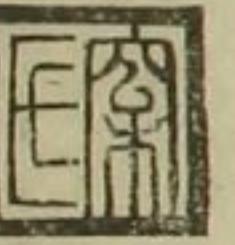
お湯の邊の事よりかと申す
まじはいよる事よりかと申す
あとも御邦よりかと申す
おもひをきの事よりかと申す
おもひを人ひたる事よりかと申す
おもひへ甲斐よりかと申す
おもひがく物と申す
おもひと申す
おもひと申す
おもひと申す

古人とあくまでもに似つかふを覺ゆ
其の恨をもてて爲す。自らお
は椿。而の内、秘とひきよ
ふと能活と爲りまく。余年ゆけて
おもひ事より、ある戸よちまく。半おお
達し卒よし。あるふくらむ家
わづひ中よし。の歎ふと、さる年
音とあくまのれの哀うつむか
うるこむかく。ある年のもち待
行跡写ひまく。ほあ、けよ和漢の
通用と儀や。おがい文通の難あれ

黒木の絶句の歌詠の間をうけてア、
そ車いをく其のまゝうつてそへ
色くはゆきあらずされ鈎のう
をうしと王曉村、自筆の詩一篇
閣ノ林宏遠うせや一束花の後名
の一章 ほく 指前とおもむく

之父常に園墓疏鞠もおひ
ふうに他處へこゝに移り多く多年
お持へぬもありあらわき
す事へ一のう半世又多
④とまよる餘の行もさうを

後日向ゆくかと
おみよしておいておの新あま小
おとおもひはまのゆかやうゆとも
さうふはせの釜のまくらふ



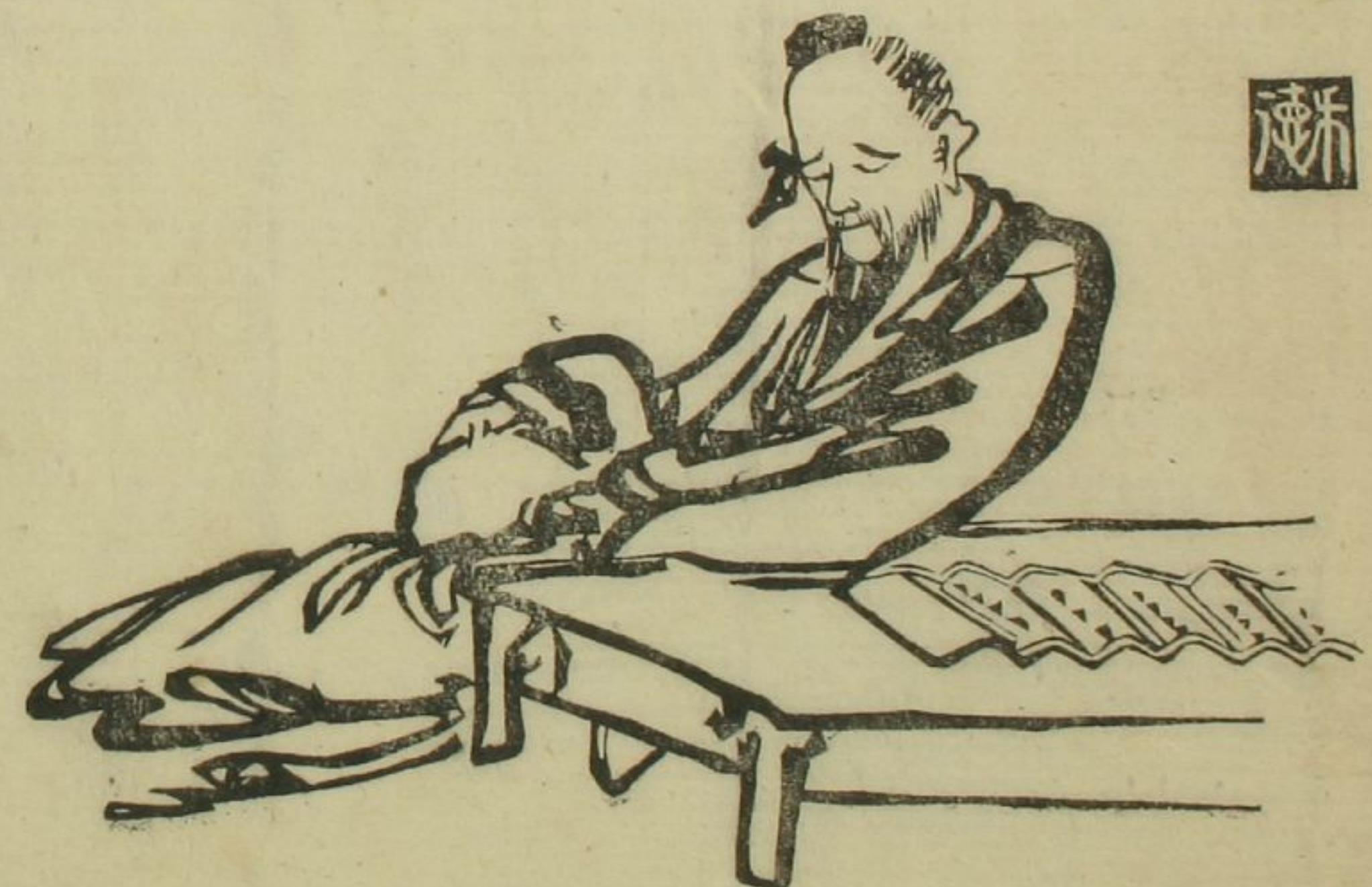
梨園珍

寫経

七

相模

九



商子真集

一出席

江一
田

主ありりや おもとと おもと
うめの あらわし 由 の ゆう 明
本貨も 芹旅も まも 芹くふ
よそ まみ 始の あへ く
ゆくも まくは ほほめ
ほり いり 里朴

山市
第二
山市
隱市
乙英
韋流
咄哉
田庵
行側
草木の軒けふ
物事あらかじめの氣

生あよゆるすすみの通ひのく
匂とけくらへそもと轟を鳴れ

詠歌

絲うよやウハシヒミヒ山ねい五井坊
一雪の聲を つゝみかくさ鳥の秋 キフ 帆を
うきよてあおぬきのやがんこも 大ガキ 半糸
きのうきくねじまー 立文 陰也

やまとはせ えく

美 ふ

白 董牛

幕とおふねまく ほりと

墨北 二狂

うそりやそりほきまの おせり

岩村 杜音

うそりゆきの雪や おせり

園 知六

めうきの裏うそくお窮小

カナタ 見尔

ゆくとお方うそくお窮小

笠松 芝流

まくろひぬきのりおも

山縣 東羽

井藏

江戸

ほの川も解る葉摘み

文東

七草や摘みたる六のむ

年路

まよにまくとめのむ

方町

まの秋もまた井の竹の

琴吹

れの柳もゑくまく井の葉の

梨一

ゆくしむかくまくとめのむ

井名

川の井の豊きつくり拓門ふ

平野

ほ内のゆくとめのむ

立而

匂ひゆくとめのむ

玉吹

一よニよ月のちとめのむ

琴松

鶴の音や人をとまきぬのむ

を蹠

あゆみや井の川の日のむく

横入

尾張

舟の水の歌後をまく車の上ナニヤ歌之

姫やまよやうすの草の もふ 百枚
猿川やきもとをもといとさ ま境
庵廬の木をアリやおれ 島下
川ちやうの野、かゝ肉あす 風丹
跡跡ふる年をいはまよト 桂柳
ひとほく御もくくや家ひ 一鳥
庶のまや秋のまわせ一ト けく
承夜

伊豆

峰やまむれや うねれ秋 クサ
ああと國をくく 夕涼 仰十
かねくまはほしや う葉前 堂故
角の峰をまくとくとく
山の峰をまくとくとく
人をよばむにりの月 一色坊
まくとくとくとくとくとく
三四
日をうかるゆくや ねえ お稚

主句の歌トカラシニ

歌

主中

孤主

音響やふ小景とよてり

カツ山

曲浦

匂のゆにうれいそりとお宿

カツ山

息仙

もともよ飾あやつります月

カツ山

危林

かまどくへぐる肉おもふ

カツ山

文急

おじく信とくや壱田川

カツ山

文急

弓月やおもひゆく

カツ山

樂泉

肩のうたまほうかわきよ

カツ山

ホトトギス

加賀

一の境もうとうふとく

ホトトギス

大暁

やむやにねづ一ノふね任

ホトトギス

舟

すうしのまみのまくらかく

ホトトギス

能登

能登の地の夜ふくらまく

ホトトギス

夜晴

越中

このせはせしまうらまく

ホトトギス

侍君

佐渡

従官へしきい節やかとくれ

相川

一思量あるつゝゆ一毛とく女作盜

ふし女やけと田りうきは清

ひ貴

うきの壁の底うかとく

望月

まめと化しておと尾をふ

毛漢

山野

崖窓もじこち白一山さう

彦國

風景

まやうよてねりあひ

北面

、まやう痛いよおまも心うら

林崎
壺中

まやうゆゆめおとうれ合

毛庭
望溪

ふれううおまきりの佛生を

経松

津とや小まむわのひあく

少二
予元

陸奥

初修一見の比

きのよやふみそく金くも黒

初白

島

東

あらまや一月 駅くもち 遠

坂下

東望

おのゆはなほのほく 駅森

壁臺

丈芝

おもむめりと 実あく えね川

江前

巴角

紀伊

花れおひみのいく おきく

篠野 芦水

大和

おもれい 晴毛い おもれち

長谷 二瀬

肥は

おと葉く 穗う ほの おも

室主 乙詠

伊も

おくとそほく ほおひく おも

図山 ね若

土佐

おもゆや おもせんせ 組むりをひ

木氣 午歌

おもゆかくして おののくの おも

向梨

おもゆかく 織く 荘 織

竹組

山城

年々のあれやト
江陽山一推
山只

東山一推

王
子
上
卷
之
八

善
卷之六

卷之三

長國
ふく
むかし
とくに
もひき
てちのく
まこと

漢書
卷之三
漢書
卷之三

也。是故人情有所不能忍者，非特不仁，亦愚也。故曰：「仁者，人也。」

いはくのまつや てこ
起居

のぬや竹の編みの
細あう風ニ

うるわしきふるみあひと
紫巾

布尾
吸石

うのえくちう巨きる
ふくよと參り御へ終ふ 六社
やのひやまつる幕くわあく 文學
まく内くまくわまく和様 健
はうの様おもてやねの月 たま
まことにまくわくわくわく魚二
まや竹もまくわやくわせ 馬移
まや峰うなまくわよまれ色 ヨイタ
まくわよまくわよまくわ 玄留

車キヨシム黒駕やアリモウ
かくらもくに面くわくわく
まくらやおのの名のまくら 内
ホのまくら 猫くわ併を多 たま
ねもまくら りあくわ 須叶 沢
う四よにまくはまくのうちとま
えゆくのれやまくの極 おも
あくまく牛のあくまく口のあ 一風

伊豆ももとてさくらの日向も
みす月や歌もまの移き
、猿はまふ管絃揚^{ミツタマ}を送
よしかや内も肩^{スカ}をまな
内もの店やはあつて九月^{ミツタマ}
山もりあてうもー
れもむかよ鳥居^{ミツタマ}と
寛光

新里とあらわす

うす

左文

きの城郭の緑とやう

水をも

ほ

湖抱

かく新や同う

新ゆつて

十菊

まく又入や包まふしむ所の山

山

送

従ぬや罕も柳

柳そろ

ミテ

限さうのねのまくよ

かとう

高

一橋もあれへ先

そよ草

山

まく新もほ高くあく

まく

金町

三主

一ハモツキナフアラ

佛

鮎田

旌旗

あぬの年とひてあらふ

有林

金子

里宮

タキや壅えつゝ全ふるの地

サクリ

里宮

菜のもやな菜もはく山留

牧牛

野

易よ人の氣よかく野

下条

義文

風煙先よ情妙そりよや

和也舟

モ里

うれしき鳴ともとれふ景

也柳

草のさくよ秋柳あつた
れニ
短あともあそよ移ふのあらゆ
せ流
收テの月をよやうりあや舞の所
カモ
柳止
離の日山里とせぬ
エラ山
里竹
音や落葉うとうあれ後
笠柳
落葉やかなの煙
カマクラ
山隠
風はく柳や川とふてろ
川翁
川翁
川翁
百駄

草すすみよきよやあよ
文彦
おまのせん跡とくの月
丸田
百通
月あそある町や柳よむる月
室
みのるくおとく細新集
杜明
碎えのあそぶ多や合歌のじ
多
ほろりぬれよ根のあつ柳
水登
獨い紳のあそよもとほれ
一帆
ちよのあそよもとほれ
英

達のきよちる伊豆アカモク 池の実

江戸

さよまとと集つて巨枝

新喜 梅仙

川ほの里たりせぬきのま

竹市

きわやゆふと言ふてあり

豊竹

ゑづれむくゆく細なあらわ

天木

ゑねむタケのあらや即ちれ

する

ひふり松よもぐる瓢

洋江

お牛と甲斐うくまくはに

村上 築

おととすきのくわく

和葉

おととすきのくわく

可

冷れよやれふくや合歎のひ

玉浦

涼風やくと鶴の草よかく

ツイナ 鶴二

音の弓の而やうしけておよも

おと

枝枝うちほきくあらや男うやひ

竹

川竹や柳よ渭

日本

あらまやさの神もくと

新喜 半梅

おととすきのひりておゆふ

和葉

やのりやあまくさうちのはあにせ
ゆきこしゆにのりや軒あゆを 里角
やくらのともゑひやるまよまよ 黒川 花砌
人の日よきく山野やういじ 二山
あらわや中へ歸てぬ もちほ 壱拾
ながよアシモキヌヤウおら 玉之 壱亭
あまくはくらめくらひのゆふ 泥古 右之
様物やぬ布の向よせもとと 曲臺

奥くさみゆきとほや庶女少
ふれの胎おねや併せう
まのり詠いくおのすのあく 芦北
里てふととよまよふ移 壱亭
や庵のあらゆくもややむ可眠
ねむものいき向ひやまよと 滋水
搞と和の土とやめくあらぶれ 希本
冬かぬに文もとゆゆやまやま

やうの神をやけありやう

以文

札右

氣にうつはる所と云ふと申ゆう
ゆうむとゆうと脚のあらう月
鳴むのめまくともや景と云う
をもやさうとさういふにほん
森りて鳩もとひう 疾月

ほくちやなの巣とおとせす
漏れの音やまとふくよ 月の月
満月やといひ竹へある。近
きものじやねくへちる下ト向
ての草やまと尼は行の神ふ
ぬすす半まくや 内馬
な行のくわゆ離のうせを
厄よりまわるやまくのむ
わ家

行秋や驚くもゆう
あはれとみかづわざと
ちゆ跡へゆくはる
すばりてとまよるもすえ
醉てふくらむやまく供のまきや
やのまくらゆけむそひ
一橋をぬるおはよおまく
ゆまや草のむすとれいりん

細うるや一叶毎々秋と寫ふ

白葉

和まくらやさし落葉もあつて

室朴

落葉のゆきのせよこの一升

岑乾

さみのむやらうじうを雲う

山桂

行毛や毛鳥のさへとくわす

孤兄

陽至腐く松風も吹きおとすト

華深

まくらやかくらむくまく

無事一束

江西

山も無くかくは祐野ふる草木

南窓

東寺町二条下

波多野

捕屋治兵衛祐

